

5 Expanding research across disciplines

研究を学際的に展開したい

第21回

「議論の十字路、百万遍」

百万遍 談議

かつて百万遍周辺の喫茶店では、「読書会」と称して、違う分野の学生が集まってひとつのテーマで議論をする姿がしばしば見られました。コーヒー1杯で数時間いても店の人は気にもせず、ひたすらコップにお水をついでくれたものです。
あるいは「下宿」に集まってなされた議論は、同じ下宿の他学部の人だけでなく、他大学の学生も加わって、それこそ朝まで延々と続けられたというのが茶飯事でした。

最近ではコロナの影響もあり、学生同士の議論というものが影をひそめているように思います。加えてそもそも喫茶店自体がどんどん少なくなっています。
そこで、往時に盛んであったそんな議論の場を、「百万遍談議」として復活させようという思いから、このような企画が作られました。参加資格は、京都大学の学部学生であれば、学部や学年は問いません。

授業ではありませんので、なにかこうしなければいけないという義務はなく、単に興味があるから参加して、人の話をきき、自分の考えを述べる。それだけです。
毎回のテーマに関して、なにか知識が必要ということはありません。唯一お願いするのは、毎回提示される文章をともかく読んでくること、それだけです。
また、「議論」はしますが、なにか結論を導こうとして話をするわけではありません。テキストを読んで思ったことを自由に話してもらえばいいわけで、もちろんその場で誰かの発言をきいて思いついたことを話しても結構です。

「人はこんなことを考えているんだ」ということを知るだけでも楽しいですし、さらには、自分の考えを人にきいてもらうことの楽しさも、大学生に与えられたある種の特権です。
気軽な気持ちで参加してください。
いろいろな人と人、人と言葉あるいは考えの出会いが生まれることを楽しみにしています。

開催日時 2024年10月19日[土]15:30-17:00

話題提供者 数間 俊哉 (総合人間学部4回生)

テーマ 「学問とは何か——歴史的に見た科学」

世話人 沼田 英治 (学術研究展開センター 特定教授)

会場 附属図書館3階共同研究室5

今回は上記のテーマについて、ともに考えてみたいと思います。
テキストは下記QRコードの申込フォームに記載のリンクからダウンロードして読んでください。

対象：京都大学学部学生(正規生)先着10名 費用：無料 使用言語：日本語

申込方法：下記URLもしくは右記QRコードよりお申し込みください
<https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/event/20241019/>



これまでの開催記録はこちら
<https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/support/gakusai/dangi/>



主催・お問い合わせ 京都大学学術研究展開センター (KURA) 「百万遍談議」担当 | jinsha@kura.kyoto-u.ac.jp



2024年10月19日
百万遍談議 開催報告

第21回 学問とは何か——歴史的に見た科学

話題提供者

数間 俊哉（総合人間学部4回生）

参加者：3名

[内訳]

1回生1名（文学）

4回生2名（総合人間学・文学）

談議メモ

今回は、総合人間学部4回生の数間俊哉さんに「学問とは何か——歴史的に見た科学」をテーマにテキストを執筆してもらい、話題提供をお願いしました。世話人は沼田英治 特定教授です。

ある架空の講義の一場面を切り取ったテキストは、教壇に立つ教授が学生たちに「学問の歴史とは一体どのようなものであるのか」という問いかけをおこなうところから始まります。それにたいして二人の学生の答えが示され、一人は「学問とは、果て無き荒野を歩み続ける一人の青年の様なもの」と言い、もう一人は「さながら天空に向かって巨塔を築き上げていくが如き営為」だと言い放ちます。

談議では、まずはそうした学問論を受けて「学問の歴史の扱い方は分野によって異なるのではないか」「理系のなかでもとくに工学では（歴史よりも）最新の技術が重要と見なされるし、一方で人文学では古典も重要視されている」といった指摘がなされました。

さらに、テキストで示された二人の学生の対比的な学問観については、前者が一人（個人）で後者が集団を想定した活動であり、それぞれ科学と人文学の対比としても考えられるのでは、という意見が見られ、世話人の沼田特定教授（専門は動物行動学・生理学）からは「賽の河原で石を積み続けるのが学問であり、石は倒れ続けるもの」とのコメントも。

後半はテキストの内容に沿って研究倫理に話が及び、一例として「才能がある遺伝子の人工授精をどう否定するか」という沼田特定教授からの問いかけがあると、参加者からは「感情的にいやだというのが（倫理に反するかどうかの）サインになるのでは」「理屈では説明できない」といった反応が見られた場面もありました。

最後には、話題提供者の数間さんが用意していたもう1本のテキストをその場でみなが読みながら感想を伝え合いました。テーマは同じく学問論にかんするものでしたが、こちらのテキストでは学問の啓蒙的側面が取り上げられ、その文脈で登場人物の一人が「私は森羅万象の全てが光明の下に晒されて欲しいとは思いません」と言うシーンが注目を集めました。

「そもそも人間がすべてを解明できるとは思っていないし、すべてが分かってしまうと問いがなくなって面白くない」「（真理の絶対的客観性を主張する）数学も含めてすべては人間の見方によって作られた世界だから、そもそもすべてを知ることはできない」といった感想が交わされ、今回は終始「学問とは何か」という大きな問いに一人ひとりが向き合い、それぞれの視点から考えをめぐらせた回になりました。